小説 竹内けん
挿絵 どどめ色マヨネーズ

立ち読み版

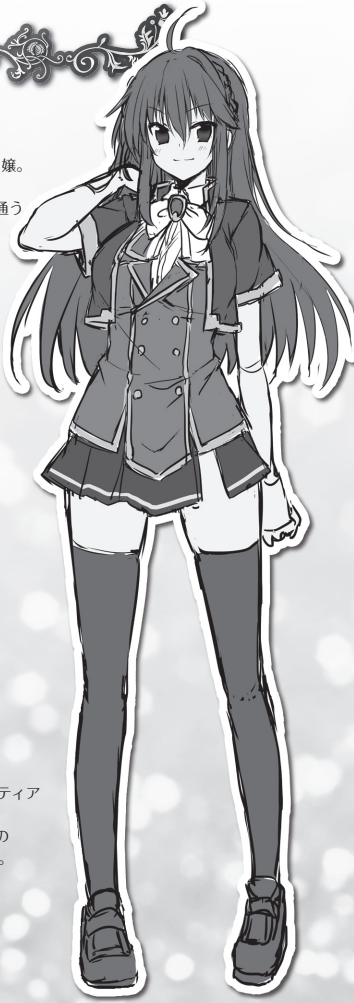
ハーレムシリーズの世界

グリンカムビ
ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
ベリージャム
シュルビー
サイアリーズ
フレイア
カブス
エバーグリーン
エクスター
ラグナイト
レヴィ
ライオネル
セルベリア
ザウルステール
カーリング
ヒューリアス
バロムリスト
ニーデンベルグ
フルセン
アヴァロン
ビーナス
樹海
メリシャント
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
ゼビュロア
シェルファニール
シェンロン
西海航路
ダリシン
モンテルナモ
マリア
ローランス
ランチェロ
ラリマール
マルタ
カルロッタ

登場人物紹介

ウルティア

オルシーニ王国の名門貴族令嬢。
負けん気が強くプライドも高い。
この春から浮遊都市キュベレに通う
ことになったわがままお嬢様。



ノワール

サブリナ王国出身でウルティア
の同級生になるお嬢様。
リシャスを気に入り自慢の
身体で積極手に誘惑する。

Characters of HaremGarden
ジェニー
学園の女教師。根は真面目。男性経験が豊富そうな振る舞いだが実際は処女で夢見がちなちょっと残念な教師。
タプ
ノワールの使用人でありメイド兼忍者。クールな見た目だが毒舌家でつかみどころがない女の子。
リシャス
思いつきで女装させられ、女学園に通うことになったウルティアの使用人。

第一章　お嬢様と付き人　009
第二章　浮遊都市キュベレ　052
第三章　魔乳の誘惑　088
第四章　林間学習　124
第五章　授業の裏側で　161
第六章　破局　211

「え？」
困惑するリシャスに、耳の上の黒髪を整えたウルティアは傲慢に応じる。
「あの乳牛女のオバケおっぱいを見た程度で、なにいきなり勃起させているのよ。肝を冷やしたわ」
「申し訳ありません」
直後に、股間を蹴り上げられて、死ぬほどの激痛に耐えねばならなかったリシャスは、小さく謝る。
「あの程度で、ピッコンピッコン立たれたのでは、おちおち学園生活を営めないわ。おまえが男だとばれたら、単におまえが犯罪者となるだけでなく、我が家の家名に傷がつくのよ」
「はい」
だから、ぼくを連れてくること自体が、間違いだったんですよ、と強く主張したいリシャスだが、できるはずもない。
「仕方ないから、わたしが毎日抜いてあげるわ。そうすれば、おまえのその無節操なおちんちんも少しは大人しくなるでしょ」
「いや、しかし」
「いいから、そこに直りなさい。股を開いて、おちんちんを差し出すの。それとも去勢す

る？」

去勢とはつまり、おちんちんを切り落とす、ということである。さすがにそんなことをされてはかなわない。

追い詰められたリシャスは、震える両手をスカートの中に入れて、お嬢様のお下がりであるショーツを脱ぐ。

万が一のときの配慮のために、学園に男物の下着は持ち込めない。だからといって、スカートの中をフルチンで歩くのは、それはそれで勇気がいる。

よって妥協して、ショーツを穿くことにしたのだ。

それから寝台に腰を下ろしたお嬢様の眼前の床に、腰を下ろして股を開く。

「スカートの裾は口に咥えるといいわ」

ウルティアの命令にリシャスは、唯々諾々として従う。

両手を後ろに置き、バランスを取りながら、足をM字に開き、メイド服のスカートを口に挟む。

当然、スカートはめくれて中身が露出する。

その光景を見下ろして、ウルティアは口元に右手の甲を当てながら楽しげに嗤う。

「くすくすくす、すっごくみっともない。外見は完璧な美少女なのに、股間からは毒キノコをあさましくそそり立てる」

「……」
「おまえ、なんだかんだ口先では言い訳していても、本音はわたしに抜いてもらいたいんでしょ。この変態♪」
嗜虐的な笑みをたたえたウルティアは黒いニーソックスに包まれた右足を伸ばし、その爪先で、逸物の裏筋を下から上、上から下へとなぞる。
「うっ」
スカートの裾を唇で挟みながら、リシャスは呻き声を上げて、身悶える。
「やだ、おまえなに色気振りまいているのよ。男のくせに。でも、そうね。いまのおまえなら、夜の街に立っていれば、そこそこ稼げそうね。純情な乙女とか勘違いした親父から、チップとかいっぱい貰ってさ。お尻の孔を掘られちゃうの、うふふ♪」
リシャスを侮りながら、ウルティアは楽しげに右足を上下させ、逸物を弄ぶ。
「あら、嫌だ嫌だと言いながらも、もう先端から汁が垂れだしたわ。わたしのお気に入りのソックスに染みが付いてしまうじゃない。口ではいっつも文句ばかり言っているくせに、身体は正直ね。わたしに振り回されるのが好きなんでしょ。この変態どエム男♪」
ぐいっと足の裏全体で、逸物を踏まれ、下腹部に押しつけられる。
「おまえがここまでスケベなバカだとは思わなかったわ」
「はぅ……」

小馬鹿にされ、侮られ、罵倒されているというのに、リシャスは恍惚としていた。
なぜなら、彼の視界にはユートピアが広がっているのだ。
（ああ、お嬢様楽しそうだな。あぁ、お嬢様の白いパンツ丸見え）
寝台に浅く腰をかけたウルティアは、嗜虐的な笑みをたたえながら、左手で腹部を抱き、右手で黒髪を整えるような気取った仕草をしているが、自慢の足を伸ばすことによって、ミニスカートがめくれてしまっている。
眼前の床に座るリシャスの至近距離から、ウルティアの白いパンツを視姦することになる。
（あ、中央にポツンとした染みがある。これってお嬢様も濡れているってことだよな。あ、どんどん大きくなっていく。うわ、お漏らししたみたいに全体が濡れて、中身が透けて見えそうだ。いや、見えるか。少し陰毛が見える!?）
始めはポツンとした小さな点だった染みが、みるみるうちに広がり、ついには失禁をしたかのように、大きな染みができてしまった。
濡れた白いショーツが張り付き、黒い陰毛に彩られたマンスジが浮き上がっている。
「はぁ……、はぁ……、はぁ……。ふふ、ゾクゾクするわ♪　いまこの広大な敷地は男子禁制。その処女臭い花園に一本だけ紛れ込んだ毒キノコ」
ウルティアもかなり興奮しているということだろう。頬が紅潮し、息が上がっている。

不意にリシャスの視線を察したらしい。表情を険しくしたウルティアは自らのスカートを手で押さえる。
「どこ見ているの？　イヤらしい！」
「すいません」
口に挟んでいたスカートを落としながら、リシャスは慌てて、顔を伏せる。
爪先で逸物を踏みにじりながらウルティアは満足そうに嘲笑する。
「くすくす、女みたいな顔して、女みたいな根性なしのくせに、スカートの中は見たいんだ。うふふ、女のパンツの中がどうなっているのか、知りたいんだ。わたしのオマ〇コ見たいんだ」
「……」
言われたい放題で悔しいが、事実なだけに言葉もないリシャスに向かって、ウルティアは勝ち誇る。
「いいわよ。見せてあげる。ここに男なんていない。女同士なら、裸を見られたって恥ずかしいことなんてないわ」
「あ、お嬢様」
リシャスが止める間もなく、ウルティアは両手でショーツをスルスルスルっと引き抜く。
股間とショーツのまたぐり部分で、ヌラーと透明な粘液の糸が引いた。

「別におまえのおちんちんに触れているから興奮しているわけではないのよ。単にわたしが濡れやすい体質ってだけよ」

言い訳がましく説明したウルティアは、ショーツから左足だけ抜いて、右足首にショーツをひっかけたまま、逸物を踏みにじる。

「さぁ、見せてあげる。おまえのご主人様のオマ〇コよ」

頬を染め鼻息荒く宣言したウルティアは、左足を外に開きながら、右手でプリーツスカートを抓み上げた。

制服姿のまま、ノーパンになったウルティアの陰部が、リシャスの鼻先に翳される。

思わず吸い寄せられそうになったリシャスは、慌てて顔を背けた。

「なに目を逸らしているのよ。よ〜く見なさい。わたしの未使用な状態を、あなたのその網膜に焼きつけていい、と言っているのよ」

ウルティアの命令には逆らえない。

リシャスは再び視線を前に戻す。

白い絹のような肌に、黒い陰毛が逆巻き、深く入った亀裂。そこから半透明の液体が溢れており、男の網膜から脳裏まで直撃する。

「どお、わたしのオマ〇コを見た感想は？」

露出の歓びに酔ったように、ウルティアは熱い吐息を吐きながら質問してくる。

「え、えーと、綺麗です」
リシャスとしてはそうとしか答えようがない。
「うふふ、当然でしょ。なにせ正真正銘の処女マ〇コだからね。まぁ、純潔な乙女なんて、この寄宿舎には掃いて捨てるほどいるけど、一番高貴なオマ〇コがこれよ」
強気な振る舞いとは裏腹に、ウルティア自身もかなり恥ずかしいのだろう。強気な声が裏返っている。
「光栄に思って欲しいわ。おまえだって承知しているでしょ。わたしはまだ男と付き合ったことがないのよ。そんな誰にも見せたことがないオマ〇コを見せてあげているの。他の誰でもない。オルシーニ王国の超名門の姫君のオマ〇コよ。たとえ二重王国の国王セリューンが見たいと言っても、見せてあげないんだから。そんな貴重なものを見せてあげているんだから、よく見なさい」
「はぁ……」
たしかに二重王国の中核たるオルシーニ家。その親族衆の筆頭たるウルティアの実家は、二重王国誕生直後に長女ユリシカを融和政策の一環として政略結婚に応じるなど、協力的である。決しておろそかにはできない家だ。
もし、セリューンが強引なことをして、ウルティアの家を敵に回せば、二重王国の崩壊に繋がりかねない。

リシャスは担任教師に同情した。
そんななか純真な生徒たちの質問合戦は続いている。
「ジェニー先生のおっぱいが大きいのって、やっぱり殿方に揉んでもらったからなのですか？」
「うふふ、まぁね。みんなも大きくなるわよ」
余裕の笑みで、ジェニーは肉まんのような胸を張る。
「いまも恋人はいるんですか？」
「そ、それはいるわよ」
「エッチも！」
すかさずの質問に自棄を起こしたのか、ジェニーは湯船から立ち上がり、自ら乳房を手で揉みながら、卑猥に腰を振るってみせる。
「もうズボズボよ、男ってほんと猿で困るわ」
（うわ～、エッチな光景ではあるんだよなぁ。でも、なんというか、滑稽にしか見えない……）
なんとも表情の選択に困っているリシャスの横では、ウルティアの口の端がにやりと、吊りあがった。
ザブンと湯船から出ると、洗い場に正座。そして、ジェニーに向かって両手をつくと、

おもむろに頭を下げた。
「保健体育の番外編ということで、先生の実体験をぜひ教えてください」
「おお」
その光景に感動した他の生徒たちは感嘆の声を上げる。
みな異性体験には興味があっても、あからさまに聞くことに躊躇いがあったのだろう。
それなのにクラスで一番プライドの高い女が、率先してプライドを捨てたのだ。
「わたくしも知りたいですわ」
ノワールまで並んで土下座したものだから、他の生徒まで並んで一斉に土下座をする。
「ぜひ、ご教示ください」
教え子一同に、土下座されたジェニーは、身をのけぞらせて硬直する。
（お嬢様って、ほんと根っからのいじめっ子だよなぁ）
プライドの高さでいえば、そのオルシーニ王国を囲む山々よりも遥かに高いウルティアである。
刃を突きつけられて、土下座を強要されたとしても、殺されたって絶対に従わない性格である。
しかし、相手を操るための土下座ならば、進んでやることもできる、ということだ。
使用人たちは、主人たちの土下座懇願に参加しなかった。みな呆れたように見守ってい

る。
追い詰められたジェニーの頬を冷汗が伝う。
「いい、いいわよ。今夜は無礼講よ。すべて教えてあげるわ」
ウルティアの策略に乗せられて、もはや引くに引けなくなったのだろう。
裏返った声で、ジェニーは自棄気味に宣言する。
(うわぁ〜この先生、バカだわ)
リシャスの心の声は、おそらく、ウルティア、ノワールと共通のものであっただろう。
湯船から出たジェニーは、処女だと思い込んでいる教え子たちを前に、肩幅に足を広げて仁王立ちをする。
「では、セックスのことを教えます。なにか質問は?」
「はい。おちんちんってどれくらいの大きさですか?」
生徒の質問に、いきなりジェニーは硬直。ややあって右手の人差し指を立てる。
「えーと、そうね。こ、これくらいかしら?」
「へぇ〜、意外と小さいんですね」
「そりゃそうよ。オマ〇コに入れるのよ。そんなに大きいもの入れたら裂けちゃうでしょ」
もっともらしいジェニーの答えに、本物を見たことがあるウルティア、ノワール、タプの三人は微妙な顔をする。

知らない少女たちは納得したようだ。
「初体験はどういうところでしたんですか？」
「え、そ、それは……海の側よ。白い砂浜の見える高級ホテル。そこに連れ込まれちゃってね。そこでキミを愛している。どうしてもエッチをしたいんだ、と泣きながら土下座されちゃってね。まぁ、いいかなって」
リシャスは頭を抱えたくなった。
（海っていったいどこの海だ。オルシーニ王国にも、サブリナ王国にも海なんかないぞ）
よっぽどツッコミたくなったが、必死に我慢する。
「キスは、ファーストキスはレモンの味がするって本当ですか？」
「え⁉　ファーストキス？」
明らかに動揺しているジェニーの様子に、リシャスは呆れ果てる。
（セックスどころか、接吻の体験もないのか？）
そこにウルティアがチャチャをいれる。
「先生みたいに、ズボズボやりまくっていると、ファーストキスの味なんて覚えていませんか？」
「お、覚えているわよ。うん、たしかにレモンの味だった。甘酸っぱいわよ」
（甘酸っぱいでは、レモンの味ではない気がするんだが……）

突っ込みどころ満載の、ジェニー先生のセックス講座はさらに続く。
「いい、男って、下半身の生き物よ。エッチするためにならなんでもやってくるわ。簡単に身体を許してはダメよ。思いっきり高く売りつけないとね」
「初体験って、どんな感じでしたの？」
わくわく顔のノワールが質問すると、滝のような汗を流しながらも、ジェニーは大真面目に返す。
「相手も初めてだったから、大変だったわ。尿道に入れられそうになってね」
「尿道ですか？」
「ええ、尿道におちんちん入れられそうになって、ほんと死ぬかと思ったわ」
得意げなジェニーの体験談を他所に、ウルティアが失笑する。
「尿道におちんちんが入るはずがないじゃない」
実際に男性経験のある女から見ると、バカらしいまでのほら話だ。
しかし、多くの処女娘たちは騙されて、担任教師に大人の女として尊敬の眼差しを送っている。
「どういう姿勢でセックスするのか教えてください」
「えーと」
もはやあとに引けなくなっているジェニーは、その場で仰向けになると、両足を高く翳

し、足の裏を合わせる。俗にいうO字開脚になると、自ら陰唇を開いてみせる。
（いくら同性同士の気楽さとはいえ、なんつー卑猥なポーズだ）
その場にいる唯一の男であるリシャスは、恥ずかしくて見てられない気分になったが、ばっちり見てしまう。
（あの奥に見える、白っぽいもの、絶対に処女膜だと思う……）
どうせ、周りにいるのは年下の処女たちばかり、なにをやってもばれないと思っているのだろう。
まさかすでに男性経験がある生徒が、二人も混じっているなどと、予想だにしていないジェニーは、右手で膣孔を指差し、得意げに説明する。
「男はここにおちんちんを入れてきます。そして、すぐにドドドドドと熱い精液を注ぎ込んでくるのです。その後、男は、もうぼくはキミしか愛せない。頼む結婚してくれ、となるのよ」
「キャー!!!」
裸の女生徒たちは、おっぱいを振りみだして歓声を上げた。
ただ一人、ウルティアは意地悪な質問をする。
「でも、先生、結婚していませんよね？　どうしてですか？」
「え、そりゃそうよ。男で妥協はできないわ。ふっ、身体は許しても、心はそう簡単には

許さないわよ」
　O字開脚のまま妙に気取った表情で、眼鏡の童顔教師はニヒルに笑う。
（いや、それってカッコイイのだろうか？）
　ツッコミたい気持ちを我慢するのにリシャスは苦労したが、他の処女姫たちには受けたようで、ジェニー先生の株は大きく上がったようだ。
「先生、どこまでもついていきます！」
「先生、いや、師匠と呼ばせてください！」
　三十人近い裸の生徒たちが、裸でO字開脚をしている教師に抱きついていく。それを女教師のほうもしっかと受け止める。
　ウルティア、ノワールの二人は明らかに面白がっているが、他の生徒たちは大真面目のようだ。
「判らないことはなんでも聞いてね。先生はいつでも、あなたたちの味方よ」
　生徒に慕われる教師と、素直で可愛い生徒たち。ある意味感動的な光景なのかもしれない。
　……全員が素っ裸ということを除けば。
（なんなんだ。この光景……）
　その場のノリでバカやっているとしかいえない上流階級の女学園の実態に、リシャスは

呆れることしかできなかった。

※

「あはは、楽しかった♪」

怒涛のようなほら話をした担任教師ジェニーと、素直にそれを信じて歓声を上げている同級生のやり取りはようやく終わった。大半の生徒は大浴場から出て行く。

残ったのはリシャスと、ウルティアと、ノワールと、タプである。

ウルティアは腹を抱えて笑っていたが、ひたすら疲れたリシャスは大きく溜息をつく。

一方で、ノワールは頬に手を当てて、深刻そうに頭を振るう。

「しかし、同じ女として、あぁはなりたくありませんわね。二十歳を過ぎて処女だなんて、悲しすぎますわ」

「まぁ、その点に関しては、わたしも同感だわ」

普段は喧嘩ばかりしている二人だが、ジェニーのあまりといえばあまりの痴態ぶりにすっかり毒気を抜かれてしまったか、頷き合う。

しかし、それも一瞬のこと。ノワールは全身で、リシャスに抱きつく。

「女学校に通いながらも、リシャスくんのおかげで処女を卒業できて、本当によかったですわ。ほんとリシャスくんには感謝ですわ」

「だから、いちいち抱きつくな。そいつはわたしの従者なのよ！」

激怒したウルティアは、ノワールとリシャスを引きはがそうとする。
「リシャスくん。早くわたくしのもとに転職してくださいな。わたくしのほうがいい待遇を保障しますわよ」
「わたしだって、こいつを大事にしているわよ。だいたい、あんたのところにいって、なにが変わるっていうのよ」
「そうですわね。あ、そうですわ。わたくしが身体を洗って差し上げます」
名案が閃いたと言いたげに手を叩くノワールに、ウルティアは眉をひそめる。
「それじゃ、主従が逆じゃない」
「うふふ、わたくしはリシャスくんを、従者としてなど扱いませんわ。あくまでも恋人♪」
そう言ってノワールは立ち上がった。
「リシャスくん。腕を出してください」
「あ、はい……」
リシャスは言われた通りに左手を差し出す。
「それでは」
むっちりとした白い太腿を開いたノワールは、リシャスの右腕に跨がった。そして、濡れた黄金の陰毛をゴシゴシと擦りつける。
「うわ、ちょ、ちょちょっと……」

動揺するリシャスに代わって、ウルティアが食ってかかる。
「ちょ、ちょっと、なに汚いオマ〇コをうちのリシャスに押しつけているのよ」
「汚いとは失礼ですわ。でも、その反応ですと、あなたはまだリシャスくんとこういう遊びはしたことがないようですわね」
むっとしながらもノワールは得意げに説明する。
「これは俗にタワシ洗いといわれる性戯ですわ。愛する男と女は単にセックスするだけではなく、このようにして愛を確認するのですわ。ああ、リシャスくんの身体を、わたくしの色で染め上げる。ゾクゾクしますわ」
湯船に浸かったリシャスの右腕に跨がったノワールは、巨大な乳房を揺らしながら、シャコシャコと腰を前後に動かす。
自らの外性器を、男の腕に押しつけて動かしているのだ。感覚としてはオナニーをしているようなものだろう。
柔らかな頬は染まり、柔らかい唇の狭間からは甘い吐息が上がり、トクトクと溢れる痴蜜が、腕に擦りつけられる。
「ああ、恥ずかしいけど気持ちいい。男の前で股を開いているだけの女なんて、すぐに飽きられて捨てられますわ。ねぇ、リシャスくん♪」
「いや、そんな……」

返答に困るリシャスに、柳眉を逆立てたウルティアが詰め寄る。
「ぐー、リシャス。秘密を守るために、やむをえずその変態痴女に貸し出しているけど、本来、おまえはわたしのものだということを忘れていないでしょうね」
「も、もちろんです……」
「なら、なぜそんなに嬉しそうな顔をしているの。臭いオマ〇コを押しつけられるのが、そんなに気持ちいいわけ？　このダメ犬」
ノワールに対抗意識を燃やしたウルティアは、その場でザブンと立ち上がると、リシャスの空いていた腕を取って、長いコンパスを開いて跨がってきた。
「え、お、お嬢様っ⁉」
「誰がご主人様か、その身に刻んであげるわ」
二の腕を跨いだウルティアもまた、濡れた黒い陰毛を、シャコシャコとリシャスの右腕に擦りつけてくる。
「やだ、これ、意外と気持ちいい♪　あぁ……」
半開きにした口元から熱い吐息を吐いたウルティアは、我儘おっぱいをブルンブルンと揺らしながら、腰を前後に動かす。
（なんでこんなことに……）
俗に「タワシ洗い」といわれる性戯を、左右の腕にダブルでやられているのである。

同じ業種なだけに、タプの苦労が他人事には感じない。
ジェニーのほうはもはや躊躇いもなく、嬉々として逸物にしゃぶりついている。
(なに、その表情。無理やり咥えさせられているのに、凄い嬉しそうなんですけど)
ジュル、ジュルジュル……。
戸惑うリシャスを他所に、ジェニーのフェラチオは貪るという表現がぴったりだ。
(しかし、初めてなんだろうから仕方ないとは思うけど、下手糞だよな)
刃物で脅して女性を言いなりにするなど最低だ。悪いことをしている、という自覚はリシャスにもある。
しかし、ジェニーの態度があまりといえばあまりなのだ。
サドっけを刺激されたリシャスは、ジェニーの頭髪を両手で捕まえると、腰を前後に動かした。
「うごっ」
いきり立つ逸物が女の喉を犯す。
同じフェラチオでも、男が主体的に動く場合、イラマチオという。
ズコ、ズコ、ズコ……。
「うご、うご、うご……」
喉を犯されたジェニーは苦しいのだろう。赤い眼鏡の奥で瞳が上に裏返り、口角からは

涎が垂れる。
（うわ、これはこれで気持ちいいな）
お嬢様たちには決してできない技に、リシャスは酔いしれる。
そして、女教師の喉奥で、一方的に射精した。
ドプッ、ドプッ、ドプッ……。
「うご」
喉奥に溢れ返った精液に、たまらずジェニーは逸物を吐き出した。
「げほん、げほん、げほん」
精液が気管にでも入ってしまったのか、四つん這いになったジェニーは激しくせき込む。
見かねたタプが背中をさすってやりながら、冷たい視線で見上げてくる。
「あなたも、結構、エグイことしますね」
「いや、つい……」
リシャスを無視して、タプはジェニーの背に馬乗りに跨がると、両手でタイトなスカートを完全にたくし上げる。
黒いパンストに包まれた蜜尻があらわとなった。
（うわ、この先生の身体、やっぱり無駄にエロいよな）
やはり十代の小娘たちとは肉の付き方が違う。

タプはクナイを逆手に持つと、濡れた股間部分を切り裂いた。
ピリピリピリ……。
「ひぃ……」
局部に冷たい刃物を当てられたのだ。ジェニーは身を固くして悲鳴を上げる。
タプのほうはいっさいの容赦なしに、オレンジ色の股布を掴むと、左に寄せる。
藍色にすぼまった肛門と、濡れた薄茶色の陰唇が、陽光のもとにあらわとなった。
「では、ザクッとやってください」
「いや、でも……」
「なにここに至って、常識人ぶろうとしているんですか。あなたの大事なお嬢様を守るためですよ」
痛いところをついてくる。たしかにこのままでは、リシャスの正体がばれて大問題だ。
その最悪の事態を避けるのに、リシャスに代案が浮かばない以上、タプの案に乗るしかない。
それにたったいま、タプの膣孔、ジェニーの口唇で射精したというのに、逸物はギンギンにいきり立っている。
(我ながら、節操ないな。でも、お嬢様を守るにはこれしかないんだ。すいません、先生)
心の中で謝りながら、充実した蜜尻を掴むと、濡れた陰唇に切っ先を添える。

「え、うそ、やめて、それだけは……」
「なに生娘みたいに動揺しているんですか？　先生はいままで十本ぐらいのおちんちんを食べたことがあるんですよね」
「いや、その、わたしは……」
ジェニーの頬が引き攣っている。
（まぁ、あれは教え子たちに見栄を張っていただけなのは、見え見えだったからなぁ）
とリシャスは軽く同情するが、タプは容赦ない。
「なら、問題ないでしょう。アバズレ糞ビッチ女に相応しい扱いです」
「では、いきます」
覚悟を決めたリシャスは、腰を進めた。
ブチッ！
存外簡単に、処女膜は裂けた。
「ひぃぃぃぃぃぃぃ」
獣のように四つん這いにされたジェニーはなんとも悲痛というか、妙に男心を掻きたてる官能的な悲鳴を上げる。
クネクネ動く蜜尻を抱きしめながら、ズブズブズブ……と逸物を押し込んでいき、ついには最深部まで飲みこまれる。

（うわ、同じ初物でも、タプさんとはまったく別物だ）
連続しての破瓜である。否応なく違いを感じてしまう。タプの狭い膣孔に対して、ジェニーの膣孔は広い。
それでいてヤワヤワと締めてくる。
「あ、ああ……び、美少年のちんぽ、美少年のおっきなちんちんがわたしの中に……」
被虐感たっぷりに嘆いているわりに、ジェニーは妙に嬉しそうである。
タプは男女の結合部に右手を入れてまさぐってから、その小さな手を陽光に晒す。
「これ血ですね？」
「……」
ジェニーは媚びるような、それでいて知られたくない秘密を知られてしまったというような、なんとも複雑な顔をする。
しかし、タプは冷然と決めつけた。
「先生は経験豊富なそうですから、これは生理でしょう。ガツガツやっちゃってください」
「そ、それは……その、ごめんなさい。見栄を張っていました。わたし、わたし、初めてなんです。だから、お願い、優しく、優しくしてぇぇぇ」
ジェニーの必死の告白を、タプは嘲笑する。
「先生の大好きな美少年のちんぽですよ。思いっきり楽しんでください」

「では、思いっきりいきます」
リシャスもまた無視することにした。なによりも、この先生が発するマゾっぽさが男を狂わす。
ドマゾな女を相手にしていると、男は否応なくサドっけを刺激される。
蜜尻を左右から両手で捕まえて、容赦なくガツガツと腰を振るった。
パンッ！　パンッ！　パンッ！
女尻と男の腰がぶつかり合う拍手音が、閑雅な学び舎に響きわたる。
「ひぃ、ひぃ、ひぃ、ひぃ」
四つん這いのジェニーは、口元から必要以上に悲鳴と涎を噴き出しながら、ヒクヒクと痙攣している。
女の身を気遣わず、ここまで身勝手な腰使いをしたのは初めての経験だ。
若干、躊躇うリシャスに、目の前のタブが命じる。
「こういうマゾ気質の女には情けは無用です。情け容赦なく扱われるほうが歓ぶものです」
仕方ないので心を鬼にして、しかし、心のどこかでは楽しみながら夢中になって腰を使う。
「ひぃ、ああ、あああ、あああん♪　いい、美少年のちんぽ、いい♪　最高♪　ぶっといちんちんでお腹の中えぐりまわされるとああん♪　気持ちいい♪　こんなの初めて♪　女

に生まれてよかった♪」
処女だったとはいえ、大人の女性だ。身体が男を迎え入れる器として完成しているということなのかもしれない。
滅茶苦茶に突きまわされたジェニーは、自ら蜜尻を貪るように振りみだし、口元からは甘い吐息とともに、涎と、あられもない痴言を吐く。
(これってレイプのはずだよな。それなのにこの先生の歓びよう。よっぽど飢えていたのね)
いささか呆れながらも、本能の赴くままに腰を振るったリシャスは、欲望のままに爆発させる。
「いくぞぉぉぉぉ」
「あ、中はダメ、中はやめてぇぇぇ」
ジェニーの懇願を情け容赦なく無視して、リシャスは最深部で射精した。
ドクン! ドクン! ドクン!
「ああ〜、温かい……温かいの〜〜〜」
上体を潰し、蜜尻だけ高く翳したジェニーはヒクヒクと痙攣している。
(うわ、やっちまった)
女性を一方的に陵辱したのは、初めてだ。射精したことで興奮の冷めたリシャスは、罪

悪感で胸がいっぱいになる。
小さくなった逸物を引っこ抜くと、ぽっかり開いた肉穴から、ドロドロと大量の白濁液が溢れる。
その光景を股の間から見て、ジェニーは恍惚と呟く。
「ああ、わたしやられちゃった。名前も知らない謎の美少年に処女を奪われた挙句に、思いっきり中出しされちゃうだなんて……はぅ、ロマンチック♪」
「へ？」
混乱するリシャスを他所に、タプのほうは猫撫で声で囁く。
「あたしたちの言いなりになるのなら、これから定期的にこうやっておちんちんを食べさせてあげますよ」
「はぅ……、わか、わかりました……。ご主人様の肉便器にしていただけるなら、歓んで見逃します」
（え、ウソ……⁉）
呆れるリシャスに、タプはどや、と言いたげな顔を向ける。
（お見事です）
脱帽するしかないリシャスに向かって、あっさり陥落してしまった女教師は、身を起こし、股を開いた蹲踞の姿勢になると、媚びた表情で、半萎えの逸物を咥えてくる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!